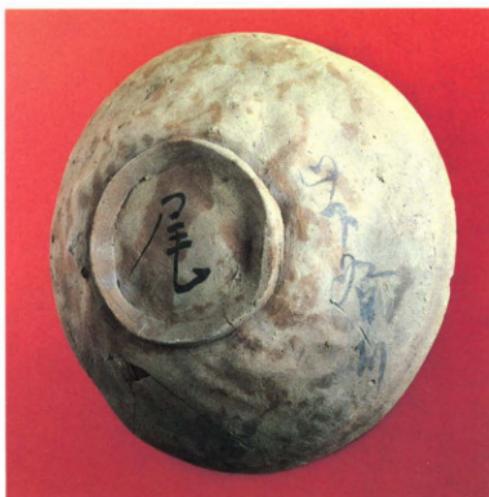


# 柏原市遺跡群発掘調査概報

1994年度



1995年3月

柏原市教育委員会

## 序 文

「特に貴重な遺物以外は廃棄処分してもいいのではないか。」という意見を耳にすることがあります。この15年間、本市が独自に実施してきた調査で、過去から受け継いだ資料は膨大な量となっています。特にご覧頂きたいものは資料館で展示、保管していますが、収蔵庫に納められている物の大半が全体の大きさ、形も分からない小さな破片です。遺物は整理箱にして7000箱にもなり、保管収納場所の確保に苦慮しているのは事実です。頭書の意見は、増える一方でかさが高く、場所ばかり取り、派手さや物珍しさ、面白味のない、そんなごく一般的な土器類をさしてのものです。

遺跡の調査で見つかるものには、人々が生活した痕跡としての「遺構」と物体として残った「遺物」の二つの物があります。遺構は埋め戻されたり消滅したりして、写真や図面以外では二度と私たちの目に触れなくなるのが常であるのに対して、遺物は容易に現物に接することができます。遺物を知ることが考古学の基本であり、遺跡の年代や性格等、その内容を推し量るのに必要不可欠な「ものさし」になります。

従来の基本的な研究方法に加えて、他の分野の科学的な手法が導入されたことで、考古学はここ十数年のうちに飛躍的に発展しましたが、当然の事ながら限界もあり、明らかになったことは大きな歴史の流れからみればほんの僅かにすぎません。しかし現在ではわからないことでも、将来何十年、何百年後に新たな技術、見地からの検証により、歴史の実態により近づくことができるでしょう。そのためにも、わずか一片の小さな土器片であっても可能な限りの情報を吸い上げ、その時に備えて資料として活用できるよう整理し、次代に伝えていくことが私たちの責務であると考えます。

末筆ではありますが、調査に際しご協力、ご理解を賜りました関係各位に感謝申し上げます。

1995年3月

柏原市教育委員会  
教育長 勅刀和秀

## 例　言

- 1.本書は柏原市教育委員会が1993年度、1994年度に原因者負担事業として実施した、本郷（ほんごう）遺跡93-2次、船橋（ふなはし）遺跡94-1次、大眾南（おおがたみなみ）遺跡93-2次、93-4次、93-5次、94-4次、安堂（あんどう）遺跡93-3次の発掘調査概報です。
- 2.発掘調査は柏原市教育委員会社会教育課 石田成年が担当しました。
- 3.調査及び報告書作成に際し、次記の諸氏の参加、協力がありました。（順不同・敬称略）

奥野　清　　谷口鉄治　　分才隆司　　松尾洋平　　西島伸彦　　山口　剛　　酒井英利香  
阪口文子　　植原美智子　藤戸康代　　有江マスミ　乃・敏恵　　村口ゆき子
- 4.調査に際し、関係各位には格別のご配慮を賜りました。記して謝意を表します。（順不同）

近畿地方建設局大和川工事事務所　近畿郵政局　田仲豊作氏　田仲清高氏  
山下福松氏　山谷安賀氏　日本ポットグレープ㈱　本田　勝氏　山本庄治氏  
大木建設㈱　㈱浅沼組　東洋建設㈱　㈱鴻池組　㈱長谷工コーポレーション  
㈱小西設計　大東建託㈱　㈱島田組　㈱アート　安西工業㈱
- 5.本書図中の方位は磁北を指し、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としました。
- 6.本書で用いた色調の表現は『新版標準上色帖』（12版 1992）によるものです。

## 目　次

序　文	
例　言	
目　次	
第1章 本郷遺跡	2
第2章 船橋遺跡	6
第3章 大眾南遺跡	12
第4章 安堂遺跡	41
報告書抄録	

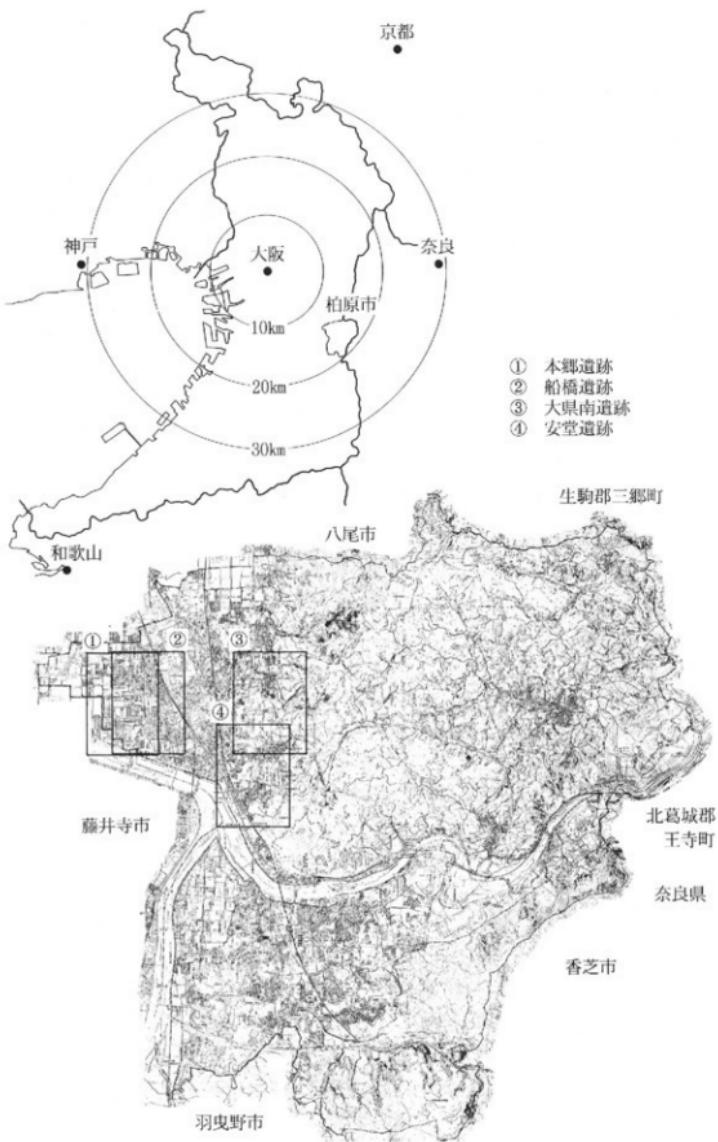


図1 柏原市位置図

# 第1章 本郷遺跡

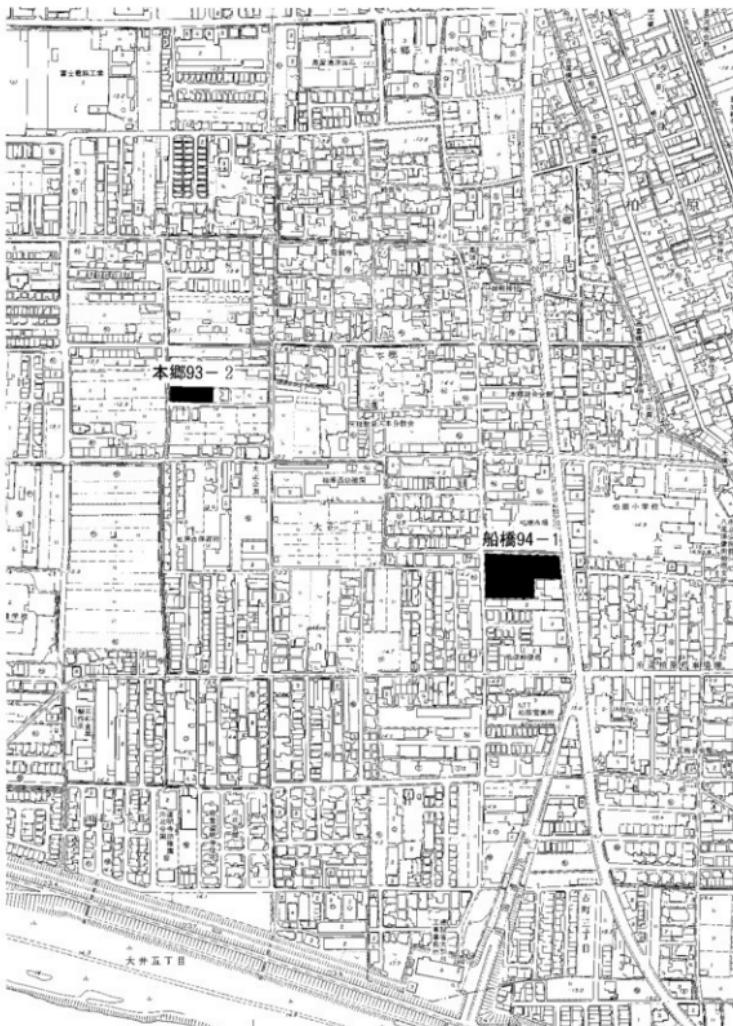


図2 調査対象地位置図 (S = 1/5000)

### 93-2 次調査

- ・調査対象地 柏原市本郷4-2-6
- ・調査期日 1994年6月6日～1994年6月17日
- ・対象面積 661.0m<sup>2</sup>

この調査は近畿地方建設局大和川工事事務所の依頼と費用負担による、職員宿舎建設に伴う事前の発掘調査です。現況は宅地となっています。

1993年9月8日に遺構の状況を知るための試掘調査（調査面積6m<sup>2</sup>）を実施し、断面観察により、次章の船橋遺跡と同様に、溝状の遺構が現在の地表から100cm下にあることがわかりました。それからさらに現地表下400cmまで掘削しましたが、遺構、遺物とも認められませんでした。試掘の結果、建物本体部分全面の160m<sup>2</sup>について調査を実施することとしました。

まず現地表から120cmまでの表土や盛土を除去し、検出した面を人力で薄く削り、遺構を出す作業である精査をしました。図4で第5層と表した暗青灰色（5B4／1）シルト層を穿ち、第4層である灰白色（5Y4／1～3／1）砂を埋土とする溝状遺構や土坑を南北方向のものを12条、東西方向のものを4条、それぞれ検出しました。溝は長さ120～700cm以上、幅65～175cm、深さ30～135cmを測ります。南北方向の溝については調査区の北にさらに延びていくものがあることから長さは確定できません。図4のNo.2・3・5～10の溝はその一部をさらに30～100cm掘り込んでいます。土坑（No.16）は長さ180cm、幅145cm、深さ120cmを測ります。東西方向にあるNo.13～16はそれと交差する南北方向の溝を上から



写真1 遺構検査面（西から）

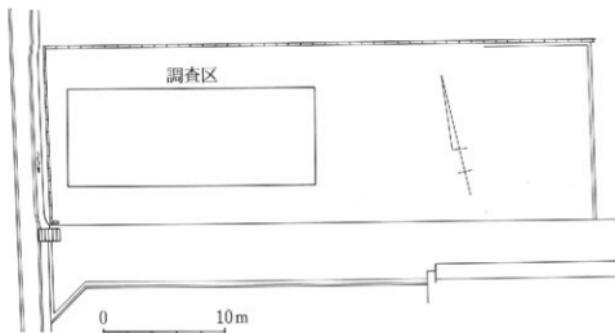


図3 調査区位置図

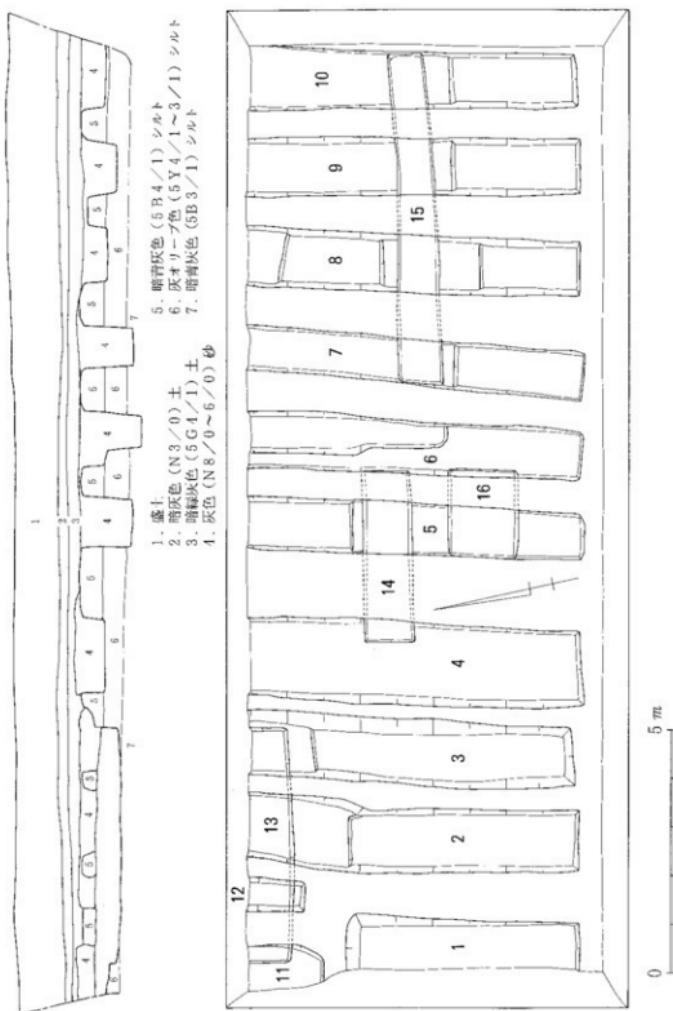


図4 遺構平面図・北壁土層断面図

掘り込むのではなく、横からトンネル状に掘り抜いています。それぞれの溝と隣り合う溝との間隔は25~145cmと溝本体の幅よりも狭いものがあり、また幅以上の深さを持つものも多いことから、遺構を検出した状況では写真3でもわかるように、調査区全面が溝で埋め尽くされているという印象を受けます。

出土遺物は古墳時代以降、近現代に至るものまでさまざまですが、実測できないほどの小さな破片ばかりです。よって、これら溝や土坑の年代については近世以降のものと思われますが、よくわかりません。

規模に進いはあるものの、同じように整然と並ぶ方形土坑や溝は奈良県生駒郡斑鳩町目安（めやす）遺跡<sup>①</sup>、大阪府東大阪市池島・福万寺（いけじま・ふくまんじ）遺跡<sup>②</sup>でも見つかっています。詳細は船橋遺跡の章でまとめますが、農業に関係するものあるいは粘土を探った穴ではないかと考えられています。

- 1) 斑鳩町教育委員会 奈良県立樞原考古学研究所 『斑鳩町 目安遺跡発掘調査概報』 1982

斑鳩町教育委員会 平田政彦氏のご教示による

- 2) 朝大阪文化財センター 『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要V』 1991



写真2 作業風景



写真3 全景（東から）



写真4 中央近景（東南から）

## 第2章 船橋遺跡

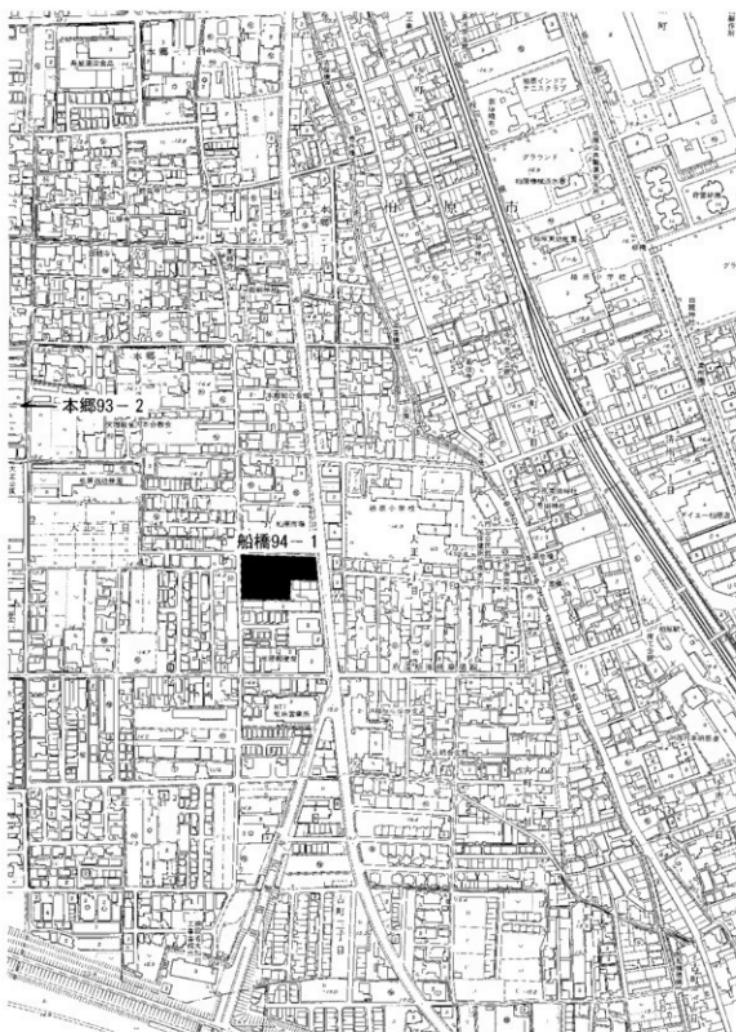


図5 調査対象地位置図 (S=1/5000)

#### 94-1次調査

- ・調査対象地 柏原市大正3-390-1
- ・調査期日 1994年8月29日～1994年11月17日
- ・対象面積 3143.85m<sup>2</sup>

この調査は近畿郵政局の依頼と費用負担による、郵便局建設に伴う事前の発掘調査です。現況は宅地となっています。

1993年4月21日と22日にまず試掘調査を実施しました。対象地の東西に各々16m<sup>2</sup>の調査区を設定して、重機により現況の地表面から600cmまで掘り下げました。主として粘土質と砂が交互に堆積した層で、断面観察により遺構として現地表下100cmに溝状の遺構があることがわかりました。溝の断面が直線的であることから、畠地等の灌漑用に人工的に掘削されたものと推定しました。溝を埋める砂から土器の小さな破片の出土がありましたが、時期を決定するものではありません。また現地表下約400cmでは土と土の間に薄く植物を含む層があり、そのことからその面に何らかの遺構があることが予想されました。以上のことから本体部分の1500

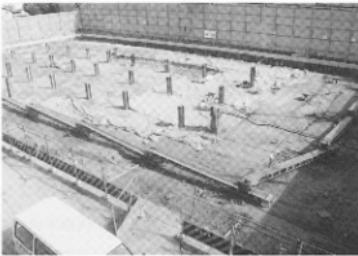


写真5 調査区全景（西北から）

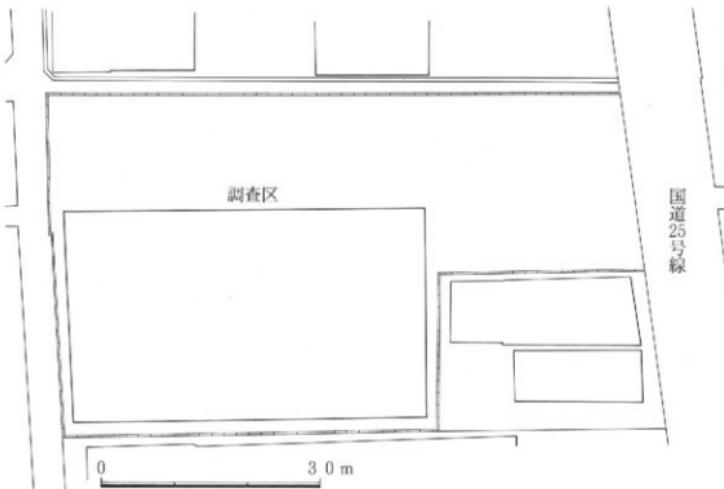
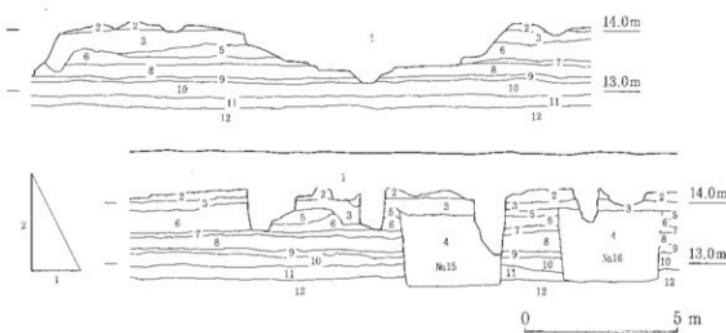
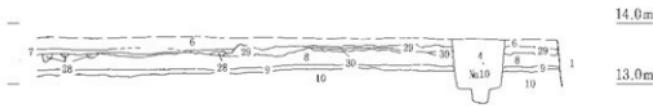


図6 調査区位置図

### 調査区北壁



### 調査区中央断面東壁



### 調査区北壁中央



### 調査区西壁南端



1. 黄土：細風土。
2. 田舎土：暗灰色（N 3/0）粘質土。
3. 暗緑灰色（7.5 GY 3/1）土。
4. 底白色（N 8/0）砂。
5. 暗緑灰色（5 G 4/1）砂質土。
6. 暗灰黃色（2.5 Y 5/2）砂質土。
7. 黄灰色（2.5 Y 6/1～5/2）細砂質土。
8. 黄灰色（2.5 Y 4/1）粘質土。
9. オリーブ色（5 Y 8/1）粘質土。
10. 底白色（5 Y 6/1～5/2）粘質土。
11. オリーブ色（5 Y 8/2）粘質土。
12. 黄色（N 4/0）粘質土。
13. 綠灰色（5 G 5/1）粘質土。
14. 綠灰色（10 G 5/1～4/1）粘質土。
15. 底オリーブ色（7.5 Y 5/3）細砂質土。
16. 綠灰色（10 G 5/1）粘土。
17. 綠灰色（10 G 5/1）粘土。
18. 底オリーブ色（7.5 Y 5/3）細砂質土。
19. 綠灰色（10 G 5/1）粘土。
20. 綠灰色（10 G 5/1）粘土。
21. 綠灰色（10 G 5/1）粘土。
22. 黄色（N 4/0）粘土。
23. 古青色（5 B 6/1～1/1）粘質土。
24. 底オリーブ色（7.5 Y 6/1～6/3）砂。
25. 黄色（N 4/0～3/0）粘土。
26. 綠灰色（5 G 5/1）粘土。
27. 黄色（N 5/0）粘質土。
- (16と17の間に、層理と隙間の間に薄く存在する。)
28. 黄色（5 Y 6/1～6/1）細砂。
29. 古青色（5 Y 6/1～7/1）細砂。
30. 底白色（10 Y R 8/1～7/1）細砂に、にせい黄褐色（10 Y R 5/1～5/6）細砂や砂がまじる。

図7 土層断面図

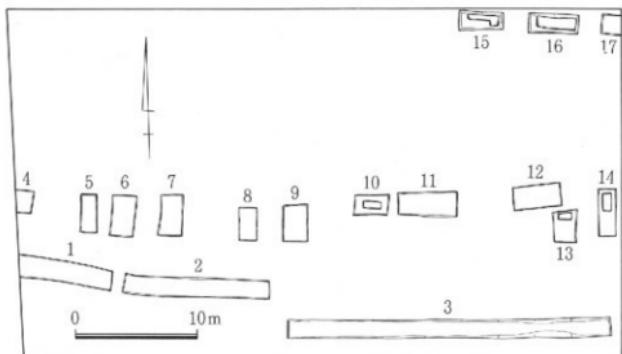


図8 遺構平面図

m<sup>2</sup>について、また最下層の植物を含む層については数か所の小調査区を設定して調査を実施することとしました。

まず現地表から100cm分の表土や盛土を除去し、検出した面を人力で薄く削り、遺構を出す作業である精査をしました。遺構として、図7で第4層とした砂を埋上とする土坑（どこう）を14基、同じく溝状遺構を3条検出しました。土坑は調査区の中央の東西方向と東北部に多く、溝は調査区の



写真6 調査区東半（東から）



写真7 調査区東半南（東北から）



写真8 調査区西半（西から）



写真9 土坑（南西から）

南辺に東西方向にみられます。土坑は長さ180~410cm、幅135~200cm、深さ45~110cmを測ります。図8のNo10・13~16の土坑にはさらに底に長さ110~320cm、幅45~100cm、深さ10~35cmの掘り込みがあります。No16については掘り上がる直前に作業をやめたのでしょうか。これらの土坑は一気に底まで掘削されたものではなく、写真9にも見られるように約30cmの単位をもって段々に掘削されたようです。溝は長さ710~2645cm、幅155~200cm、深さ80~85cmを測ります。これも細かく観察すると上坑と同様に段々に掘削されています。No3についてみてみると、東西両端での底の高さの差は約10cmしかありません。流路として水を流すような意図はなかったものと思われます。前章の本郷遺跡では接するように並んでいるのに対して、ここでは間隔や方向はまちまちで、密集の度合いも比べものにならないません。

第8層を穿つ農耕具痕、人や牛と思われる足跡がみつかりました。農耕具の痕は溝状に80~180cmの間隔で隣り合って東西方向に並んでいます。刃先の幅が15~20cmの鋤による農作業の痕跡と思われます。2回打ち込んでは後ろに下がり、また打ち込むという作業の繰り返しのようです。深さは最も深いもので10cm弱しか残っておらず、上層の砂の層では確認できなかったので、本来どの層から打ち込まれたものかはわかりません。牛の足跡は鋤溝のそれぞれの間でみつかりました。鋤溝と平行して足を進めています。現地表下395cmで植物を含む層を検出しました。第25層を除去すると写真13のように場所によっては木が根を張った状態で見つかるところもありました。但し土器類の出土がなかったことから、



写真10 農耕具痕、足跡 (東から)

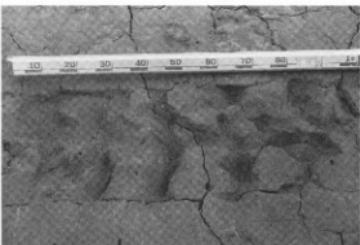


写真11 農耕具痕細部 (北から)

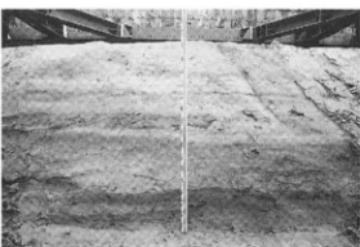


写真12 下層断面 (東から)



写真13 下層調査区 (南西から)

時期はわかりません。植物やその上下の層を持ち帰り、どのような種類の草や木が生えていたのかを葉や種から知るために、洗浄、分類等、現在作業中です。

遺物は第8層までの各層から出土しました。全出土量は少なく、小片で著しく磨滅しているものがほとんどで、図にできるものは図9に示した軒丸瓦、すり鉢、土鍋（どすい 漁に使う網につけるおもり）などでした。また

各時代のものが混ざって出土することから、遺構の時期をはっきりとは決めかねるのですが、少なくとも土層の堆積順序から、まず畠として農耕具痕や足跡を残した時代があり、後に細かな砂が堆積するような自然現象をうけ、そして土坑や溝を掘り込んで何らかの形でこの地を使ったことはわかります。おそらく農耕具痕や足跡については中世をさかのぼらず、土坑や溝については近世をさかのぼらないものと思われます。

土坑や溝の性格については、奈良県生駒郡斑鳩町日安（めやす）遺跡、大阪府東大阪市池島・福万寺（いけじま・ふくまんじ）遺跡で検討されており参考にすることができます。ただし規模や密度、掘り込まれている土層の基質等が異なることから、同じものととらえて解釈することはできないかも知れません。斑鳩町日安遺跡の調査担当者はその調査概報の中で「農業以外に利用された史料が見あたらないこと、またこの遺構以外の遺構が発見できないこと」から農業関係の遺構の可能性を残しながらも「土坑がそれぞれ独立していて排水に都合が悪い」ことなどから「農業関係のものであるとするには、矛盾だらけで」「粘土採取ということが考えられるが、またそれにしてもまったく効率の悪い採取のしかたであり、やはり認めがたい。」とまとめています。東大阪市池島・福万寺遺跡では「断面は四角に掘られており、溝の下部周辺には粘土の堆積がみられるところから粘土を探掘した溝と考えられる。」とされています。それらをふまえて船橋遺跡での状況をみてみると、その配置が地割りに則しているとは認められないこと、規模に規格性がないこと、底面に掘り残しがあっても支障がなさそうであることなどから、掘削後の利用を意図されたものではなく、掘削行為そのものに意味があったものと推定します。今後の資料の増加を待って検討を加えていくこととします。

#### 引用・参考

斑鳩町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩町 日安遺跡発掘調査概報』 1982

側大阪文化財センター『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要V』 1991



写真14 作業風景

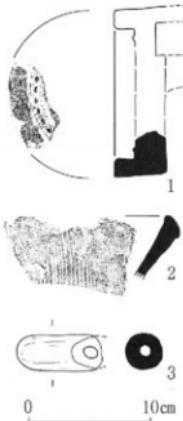


図9 出土遺物

### 第3章 大県南遺跡

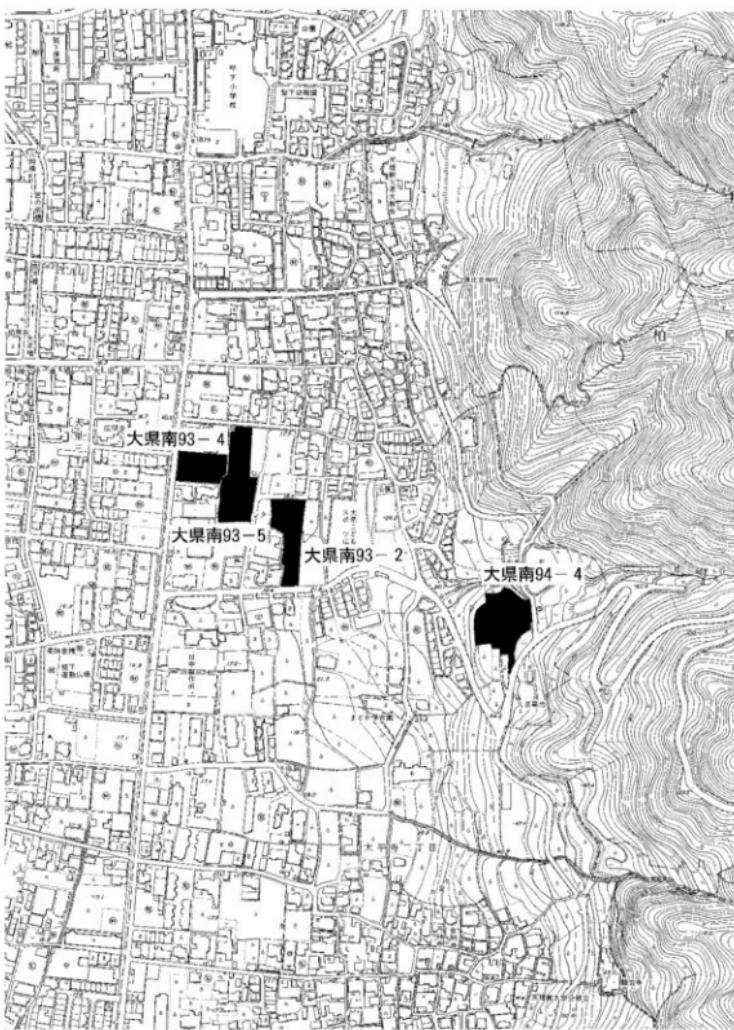


図10 調査対象地位置図 (S=1/5000)

### 93-2次調査

- ・調査対象地 柏原市大県4-369
- ・調査期日 1994年1月10日～1994年2月10日
- ・対象面積 2360.19m<sup>2</sup>

この調査は田仲農作氏、田仲清高氏の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。現況はぶどう畑となっています。1993年2月16日に試掘調査(12.5m<sup>2</sup>)を実施したところ、遺物が多く入った層(遺物包含層)や柱跡が見つかったことから、建物の本体部分のうち北半分(324m<sup>2</sup>)について発掘調査を実施することとしました。調査は遺物包含層の上面までに堆積した畠の耕土などを重機で除去し、以下遺構面までを人力により掘削しました。但し、掘りあげた土の仮置き場所の都合から、調査区を北と南に分け、北側から実施しました。

現地表下70～130cm(第2層)は古墳時代から中世までの土器類を多く含み、その層を除くと遺構面となります。やや東南方向に高く、西北方向に傾斜しており、標高は18.0m前後を測ります。遺構が穿たれる層(第5～9層)には遺物を含みません。

遺構として柱跡、溝が見つかりました。柱跡は北辺と南側で多く、中央では多くありません。四角で角が丸い、隅丸方形と呼ばれる柱跡は一辺が30～100cm、深さ15～50cmを測ります。円形のものは径が15～50cm、深さ15～50cmを測ります。

それらを大きさや間隔、軸の方向から分類して判断すると、調査区南西部に建物が1基、他に南北を軸とする槽が数基あると考えられます。溝は南半で見つかりました。半円状に回る1条とそれから分かれるもの、隣り合うものが各々1条があります。幅は20～35cm、深さ15cmを測ります。さらに調査区外南へ延びる1条があり、幅40～60cm、深さ20～35cm



写真15 調査地近景（西から）

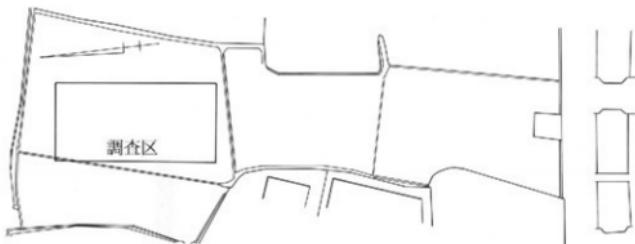


図11 調査区位置図 (S=1/800)

を測ります。

遺物包含層や遺構を埋める土からコンテナに換算して50箱分の土器類の出土がありました。土器類は古墳時代から中世にいたる各時代のもので、須恵器、土師器が特に多く見られます。図13のNo.1は須恵器の蓋。内面天井部に同心円の当て具痕が残り、外面天井部には「一」のヘラ記号があります。全てを図示していませんが、ヘラ記号を持つものはNo.2をはじめとして今のところ10点近く確認しています。No.11は須恵質の土管状の土製品です。口縁部径は15.2cm、上部から6.1cmにある突帯部径は20.3cmを測り、体部は下部で開いています。口縁端部はナデて平坦に仕上げられ、突帯は貼り付け、体部はカキ目調整を施しています。大阪府堺市の中邑・大庭寺（すえむら・おおばでら）遺跡をはじめ他遺跡での出土例では陶棺（とうかん、焼き物で作られたひつぎ）とされています<sup>1)</sup>。図14のNo.23はルッボ状の小型の壺。球形をしており、器壁は厚く、内面には接合痕がはっきりと残ります。頸部から体部にかけての約1/2の範囲に朱が付いたような赤い色の痕跡があります。No.24は移動式竈。釜穴口縁部から焚き口上半にかけて良好に残っていますが、下半を欠きます。口縁部径は27.3cm。体部の両側に三角形状に尖る把手がやや下向きにつきます。庇（ひさし）は付け庇で厚く、大きく突出します。他に釜穴口縁部に須恵器の甕の内面に多く見られるような同心円の当て具痕を持つ破片も多くあります。No.25はガラス玉の鉄型。縦5.7cm、横3.6cmの破片で、厚さは1.5cm。色調は赤褐色（10YR4/4・4/6）をしています。型部は径5.5mm、深さ2.5mmで、その中心から径1.0mm弱の小穴が貫通します。図示した



写真16 北半全景（北から）



写真17 南半全景（南から）



写真18 南半（東北から）



写真19 南半建物（南から）

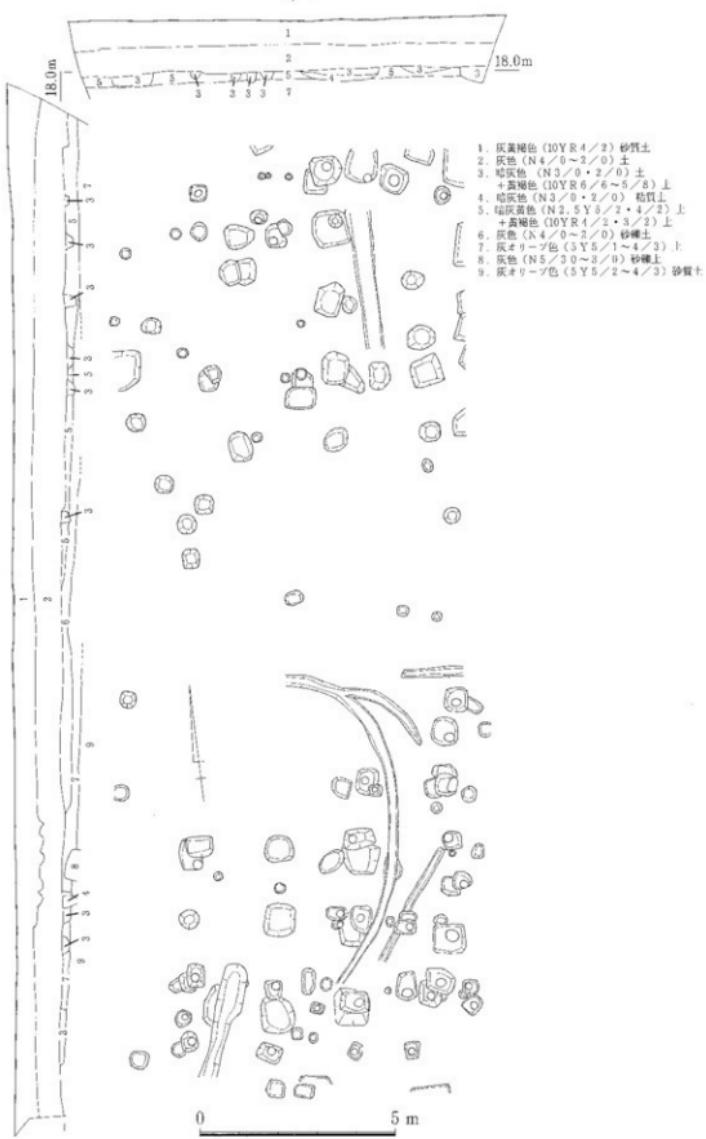


図12 遺構平面図、西壁・北壁土層断面図

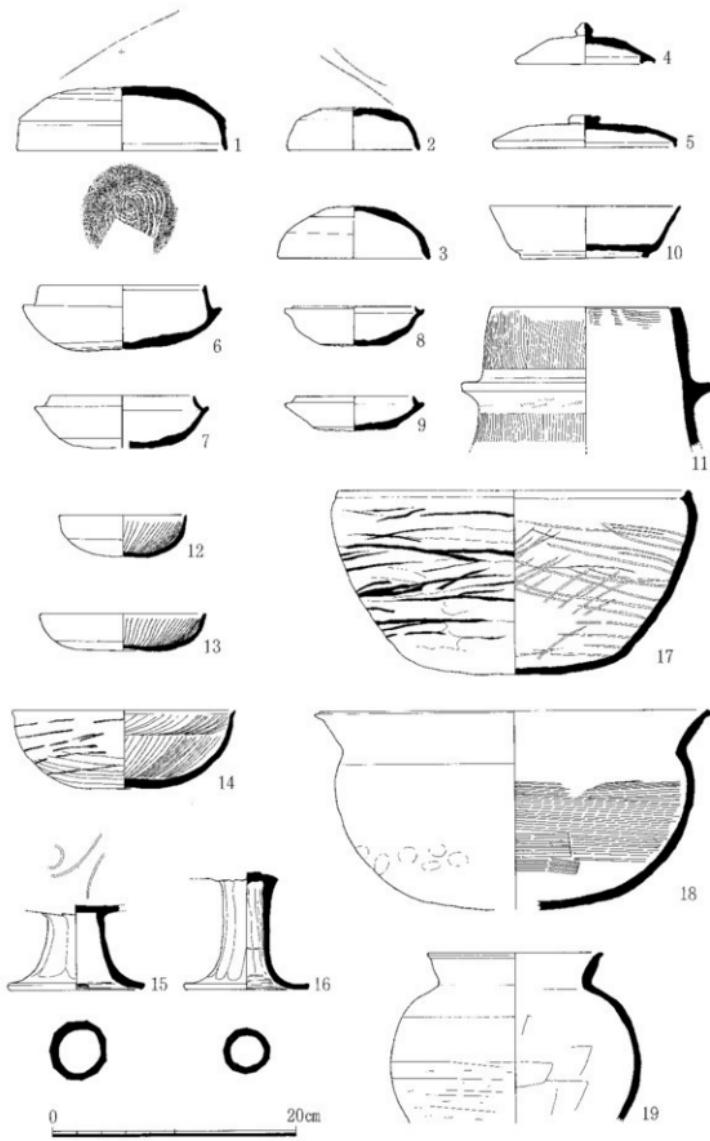


図13 出土遺物 (1)

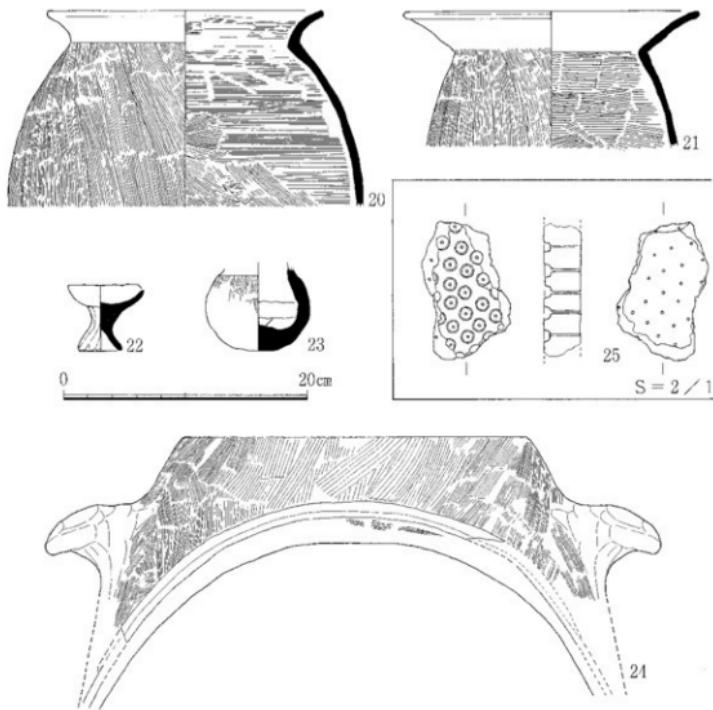


図14 出土遺物（2）

ものに鉄滓（てっさい、製鉄や鍛冶の作業工程で生じる鉄のかす）、羽口等鍛冶関係遺物も出土しています。

- 1) 大阪府教育委員会・脚大阪府埋蔵文化財協会『陶邑・大庭寺遺跡』1989 他

#### 93-4次調査

- ・調査対象地 柏原市大県4-359-1
- ・調査期日 1994年6月14日～1994年7月6日
- ・対象面積 1690m<sup>2</sup>

この調査は山下福松氏の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。現況はぶどう畠となっています。1993年11月12日に2箇所の調査区を設定した試掘調査（計21m<sup>2</sup>）を実施し、その結果、遺物包含層、遺構を検出したことから本調査を実施することとしました。建物本体部分については基礎の深さの設計変更がなされたことから工事時の立会とし、浄化槽部分の81cmについて調査対象としました。

まず現地表下120cmまでを重機により除去し、遺物包含層の掘削と遺構精査を人力により行いました。遺構として井戸、柱穴、溝、土坑がみつかりました。

掘り下げていくと、まず井戸が調査区の東端でみつかりました。標高は15.2mになります。検出時の平面形は四隅が丸くなった方形で、径は160～180cmを測ります。人頭大の石が掘形の西側と、南と西の井戸棹上に並びます（写真25）。もともと東と北にもあったものと思われます。井筒は一辺80～100cm、深さ45cmの上段と、一辺80cm深さ200cm以上の下段の2段からなります。段は東と北で明瞭で、20cm程度の幅をもっています。南と西については土



写真20 調査地全景（東から）

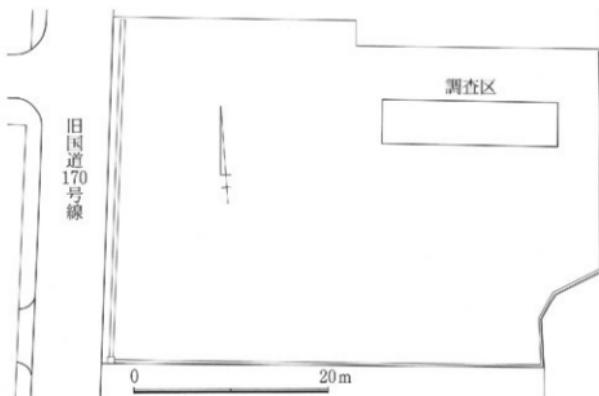


図15 調査区位置図

圧により上段の井戸桟が内側へ押されてきたようです。桟が井戸の中程と最下段の2箇所にありました。中程の桟については、井戸検出面から130cm掘り下げた標高13.9cm付近で、はすれて落ちたような状態でみつかっています（写真24）。机と思われる板状の木製品や、ヒョウタンのような植物もこの高さでみつかりました。そこから80cm掘り下がった標高13.1m付近で、墨書き土器を含む中世の土器群がみつかりました（写真27）。さらに20cm下がった標高12.9m付近で最下段の桟が現れました（写真28）。井戸を埋める土は総じて粘土質でしたが、最下段の桟から下の底部には砂が充填されていました。この井戸はみつかった上器類から奈良時代に使用されはじめ、鎌倉時代には埋められたものと思われます。覆い屋の存在を確認するため井戸の周辺を丁寧に精査しましたが、柱穴などはみつかりませんでした。

次に井戸がみつかった面からさらに掘り下げる、柱穴、溝、土坑がみつかりました。この面の標高は井戸がみつかった面よりやや低く15.0m。このことから井戸よりも以前に柱穴などが掘られていたことがわかります。調査区の東では柱穴が規則的に並んでいました。一辺40~70cmの隅丸方形の掘形で、深さは現状で25~50cm残っています。掘形内に直径25cmの柱の跡が認められるものもあります。柱間の寸法は125~175cm。底に、より柱を安定させるための根石を据えるものはありませんでした。これら12個の柱穴を東西3間（間=けん、柱と柱の間がいくつあるかという考え方で、1間=6尺=約180cmという数値を表すものではありません）、南北4間以上の建物を構成するものと思われます。

遺物として須恵器、土師器等がコンテナに換算して20箱分出土しています。

図18は遺物包含層からみつかったものです。中でも図18のNo6のガラス玉の鋳型は注目されます。縦4.0cm、横3.8cm、厚さ1.3cmの破片で、色は赤褐色（10YR4/4~4/6）をしています。型部は径4cm、深さ3mmで、その中心から径1mm弱の小穴が貫通しています。破片ですので全体の大きさはわかりませんが、円弧状に残る面があるので円形に近い形

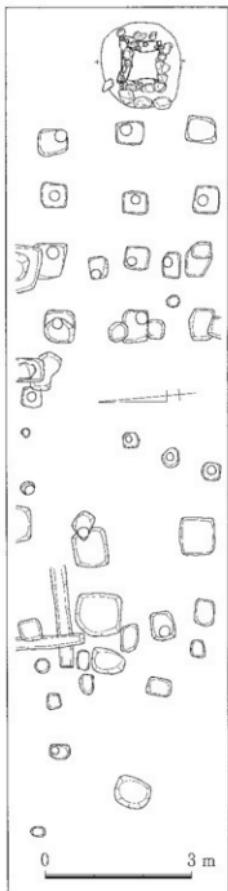


図16 遺構平面図

をしていたと考えられます。小穴に細い鉄線を通し、溶けたガラスを流し込みます。上面は表面張力により丸くなり、ガラス小玉が出来上がります。この調査地から東南100mの大県南92-2次調査地でも鋳型がみつかっています。写真29（左・大県南93-4、右・大県南93-2）で比較するとわかるように型部の大きさが異なります。大県遺跡、大県南遺跡では以前からの調査で鍛冶炉やそれに伴う作業場状の施設が多くみつかっていることから、古墳時代に鍛冶に携わった工人の作業場や聚落があったと考えられています。熱量の高い火を扱うということからみれば鉄だけではなく、ガラス、製塩等、工業的活動全般に従事していたことがうかがえます。

図19は井戸から出土したもので、No7は井戸の最上部から、No8～31は井戸を埋める土から、No32～36は最下層からみつかりました。井戸の中ほどから出土した土器類の中に文字が墨で書かれたものが2点あります。No11については「尾」「山下脊川」、No12については「張」と読みます。調査地の東250mには「河内六寺」の一つである「山下寺」の推定地があり、それと関係のある人名あるいは地名といった固有名詞が記されたものと思われます。また「尾」と「張」については字面が異なりますが二つで「尾張」となります。調査地周辺で「尾張」に関係があるところを探すと、南2.3mの現在の柏原市片山町、玉手町、円明町に「安宿郡尾張郷」（あすかべぐんおわりごう）があったことが『和名抄』から知ることができます。そこを拠点としていた尾張氏と関係があるのでしょうか。No35は鐵鑄（鉄製のやじり）で重さは11.2m。No36は和同開珎（わどうかいちん 708年から作られ始



写真21 全景（東から）



写真22 西半（東から）



写真23 作業風景

井戸上面

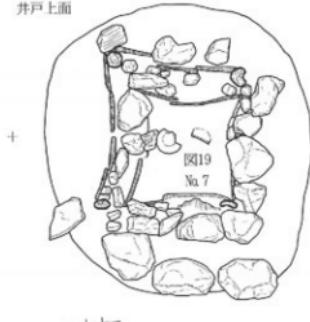


図17 井戸 (S=1/30)



写真24 井戸 (西から)



写真25 井戸検山時 (東北から)



写真26 作業風景 (東から)



写真27 土器出土状況 (西から)



写真28 最下層 (西から)

めた最初の日本製の銭貨)。ところどころ腐食が進み、残りはよくありません。

木製品として机と思われる板状の製品(写真32)、井戸枠材(写真33、34)等があります。机は長さ52.5cm、幅30.0cm、厚さ1.5cmを測ります。脚を差し込んだと思われる一辺2cm前後のほぞ穴が四隅近くに4箇所にあいています。板の片面に机の短辺と平行してすじ状に痕跡が認められることから、板状の脚であったと思われます。井戸枠材は長さ200~230cm、幅30~55cm、厚さ4cm前後を測ります。8枚の部材のうちの2枚に下端部に切り欠きをもつものがあり(写真34)、建築材からの転用であったものと思われます。図や写真に示していませんが他に井戸上段の枠材や棟等の小さな部材があります。上段の枠材は長さ100cm弱、幅20~30cmと下段の枠材に比べて極端に小さくて薄い部材が多く使用しています。隅柱は長さ90~135cm、直径10~15cmを割り、打ち込むために先端を削ってとがらせています。棟は長さ80cm弱、4cm角の棒状で、両端はそれぞれ隣り合う棟と組み合うように切り欠きがあります。

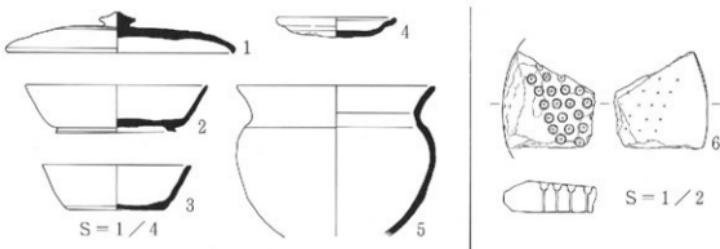


図18 出土遺物(1)

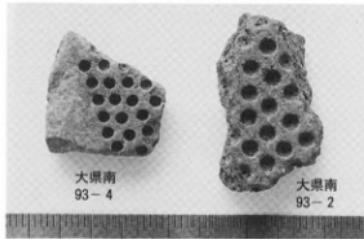


写真29 ガラス玉鋳型

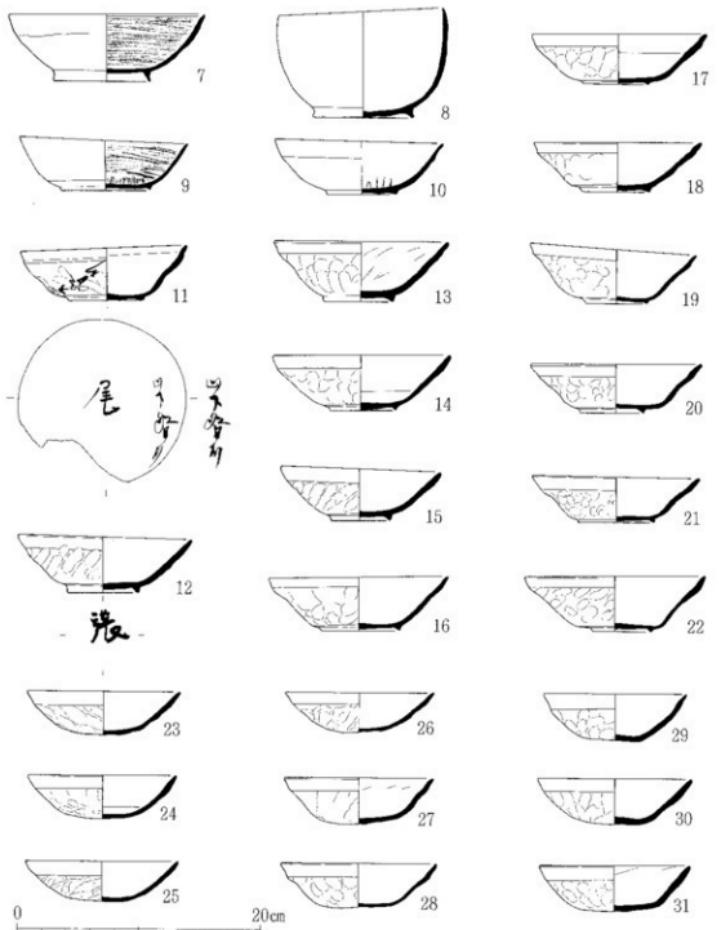


図19 出土遺物 (2)

井戸を埋める土（コンテナ50箱分に相当）を全て持ち帰り、手で細かく砕き、土を水で洗い流し、フライに通し、砂粒とそうでないものに分類しました。その結果、動物の骨、昆虫の破片、種子類がみつかりました。動物の骨については小型のカエルのようで、頭、背、腕、足であることがわかります。昆虫はハムシやゴミムシ等の陸生の昆虫が多いようです。種子類についてはカラスウリ、センダン、ウメ、モモ、ヒヨウタン、カナムグラ、ムクノキ等がみられます。



写真30 墨書き土器「尾」他



写真31 墨書き土器「張」

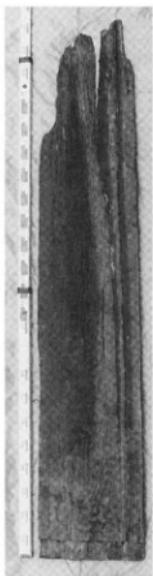


写真33 井戸枠材

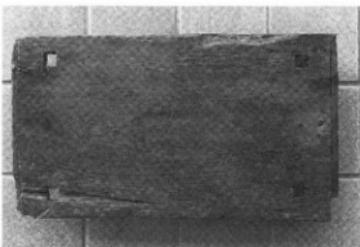


写真32 机



写真34 井戸枠材下端部

墨書の判読については四天王寺国際佛教大学  
藤沢一夫氏、帝塚山短期大学 山本昭氏、  
奈良大学 水野正好氏、堺女子短期大学 堀  
口義信氏、大阪市立大学 栄原永遠男氏、また  
た井戸から出土した自然史遺物の同定につい  
ては大阪市立自然史博物館 宮武頼夫氏、同  
樽野博幸氏、同 岡本素治氏、御大阪府埋  
蔵文化財協会 秋山浩三氏に種々ご教示、ご  
指導を賜りました。末筆ではありますが記し  
て謝意を表します。



写真35 種子類



写真36 動物遺体



写真37 昆虫遺体

### 93-5次調査

- ・調査対象地 柏原市大県4-360、361、363-1
- ・調査期日 1994年2月24日～1994年3月31日
- ・対象面積 2996.05m<sup>2</sup>

この調査は山谷安賀氏の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。現況はぶどう畑となっています。まず1993年12月21日に2箇所の調査区を設定した試掘調査（計15m<sup>2</sup>）を実施しました。その結果、遺物包含層、遺構を検出したことから本調査を実施することとし、本体基礎により掘削される南半分（1区）と浄化槽部分（2区）を調査対象としました。1区では図21の第3層、2区では図22の第22層までを重機で除去し、以下を人力で掘削、精査しました。

1区では柱穴、溝、井戸がみつかりました。その面は標高15.6～15.8mを測り、西に低くなっています。柱穴は一辺20～90cm、深さ10～75cmを残します。これらで構成される建物が3棟以上あるようです。溝は幅20～70cm、深さ10～15cmを残します。井戸は調査区の南端でみつかりました。標高は15.9mになります。井筒は直径40cm、高さ27cmの曲げ物を使用しています。3段残っていました。人頭大前後の石で曲げ物の安定を図っています。掘形は検出時の平面形は円形で、直径は240cmを測ります。検出面から斜めに掘られ、55cm下で直径115cmとなり、角度を変えて垂直状にさらに75cm掘り下がり、直径65cmの底となります。底には位置を決めたためか、曲げ物の大きさに合わせて直径40



写真39 1区南半（東北から）

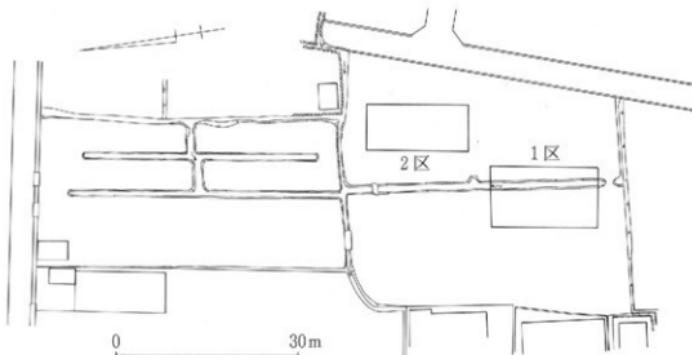


図20 調査区位置図

cm、深さ10cm、掘り下げられていました。また位置の基準となつたのか曲げ物に接して杭が1本打ち込まれていました。この井戸はみつかった上器類から鎌倉時代に使用されていたものと思われます。覆い屋の存在を確認するため井戸の周辺を丁寧に精査しましたが、柱穴などはみつかりませんでした。

2区では柱穴や溝状の遺構がみつかりました。標高16.0mを測り、検出面はほぼ水平です。溝状遺構の埋め土（図22の第28層、炭が混じる）には6世紀後半の土器類が多く入っています。また調査区の北辺を中心にして、鉄分を多く含む、堅くしまった層（図22の第27、30、31層）がありました。この二つはその土質や伴う遺物から鍛冶に伴う遺構とみられます。柱穴は一辺30~80cm、深さ10~50cmを残します。柱穴は溝状遺構の埋め土を掘り込んでいるものがあることから、6世紀後半以後の時期に掘られたと思われます。

図24のNo1~16は1区の包含層からみつかりました。No6は小型の須恵器の杯身。直径が5.2cmと通常の杯身に比べて半分くらいの大さしかありません。No14は砥石。砥石は図や写真47に示したものその他に多くあります。流紋岩（りゅうもんがん）、花崗岩（かこうがん）、砂岩（さがん）等の種類があり、用途により大きさや材質を変えて使用していたようです。No15、16は移動式の竈で、上端部である釜穴の部分です。端部に須恵器甕の内面に見られる当て具痕と同様の同心円文があります。図に示したほかに10数点を確認しています。No17、18は籠の羽口（ふいごのはぐち 火をおこすために炉に風を送る管の先端部）。風の送り口が真っ直ぐなものと「ハ」字状に開くものとがあり、一般的に後者の方



写真39 1区南半（東北から）

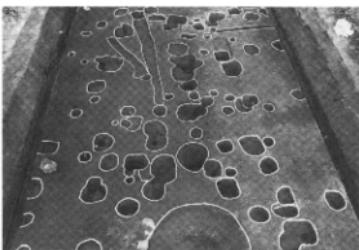


写真40 1区全景（南から）



写真41 2区全景（南から）



写真42 作業風景

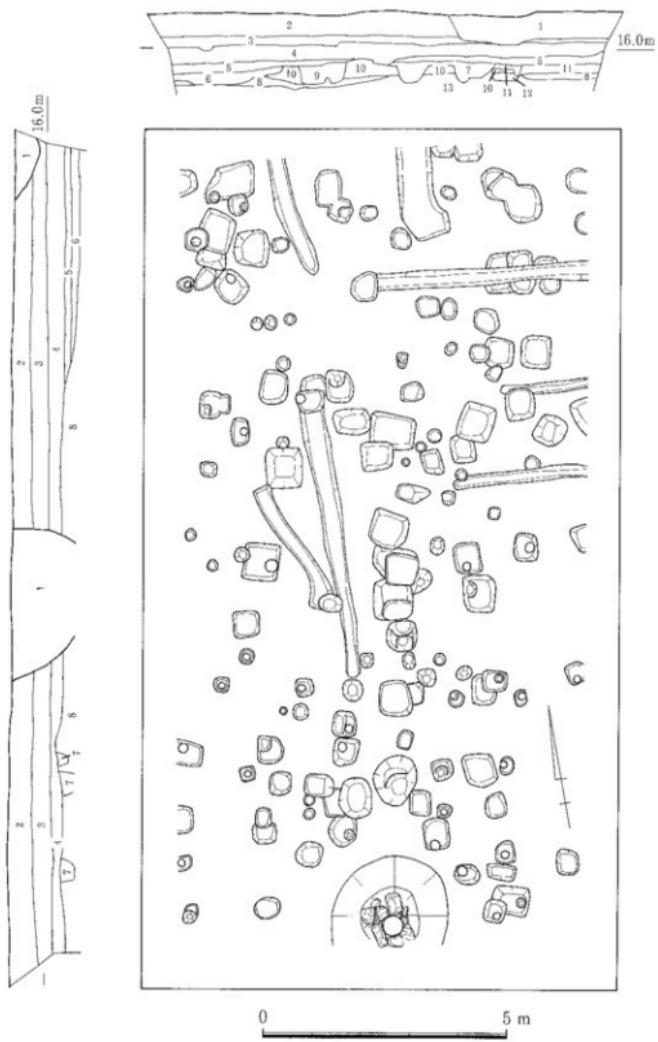


图21 1区遗物平面图、土眉断面图

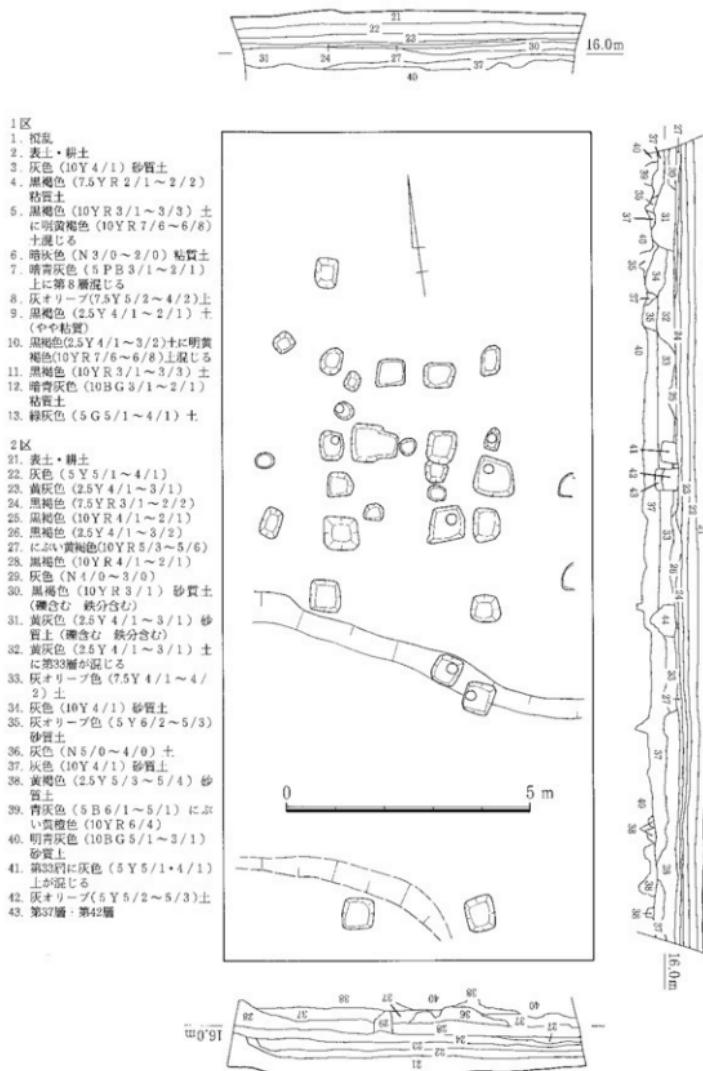


図22 2区遺構平面図、土層断面図

が時期的に古くに作られたものと考えられています。No17については先端から5cmのところに直線で構成される線刻があります。一端を欠くことから全体の図柄はわかりません。No19は土馬（どば 馬の形を模した土製品）。図は馬の左侧面をみたものと後ろをみたものを示しています。過去に柏原市内でみつかったものと比べて、こと細かに馬具が表現されています。前から面繫（おもがい くつわを固定する革や組みひも）、胸繫（むながい 胸の部分に装着し鞍の前部を固定する革や組みひも）、尻繫（しりがい 尻に装着し鞍の後部を固定する革や組みひも）、杏葉（ぎょうよう

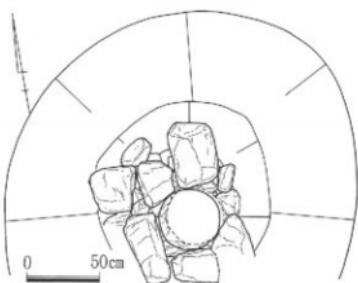


図23 井戸



写真44 井戸（北から）



写真43 井戸曲物（北から）

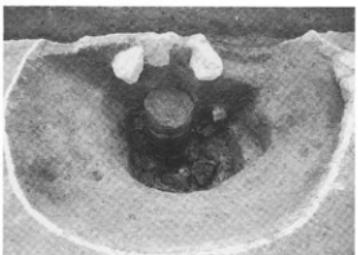


写真45 井戸掘形埋土除去



写真46 井戸完掘

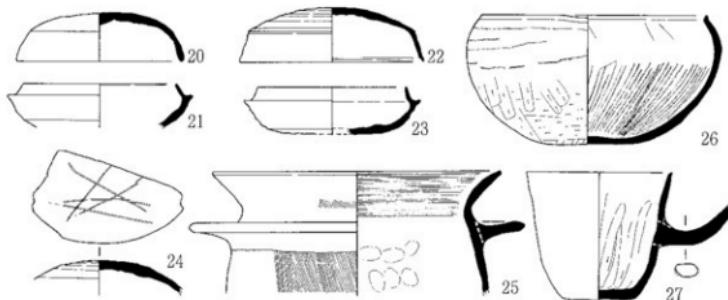
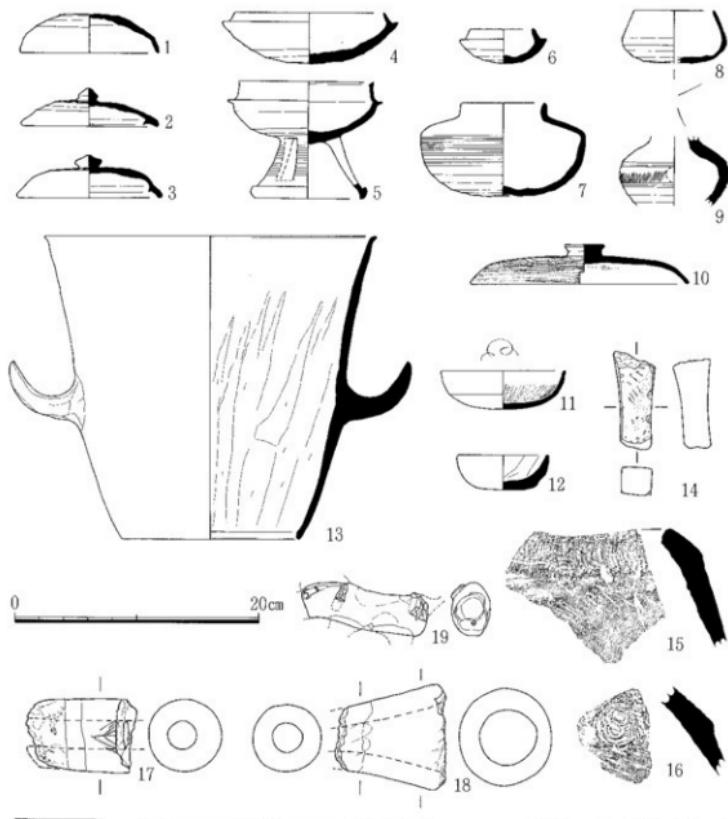


図24 出土遺物（1）

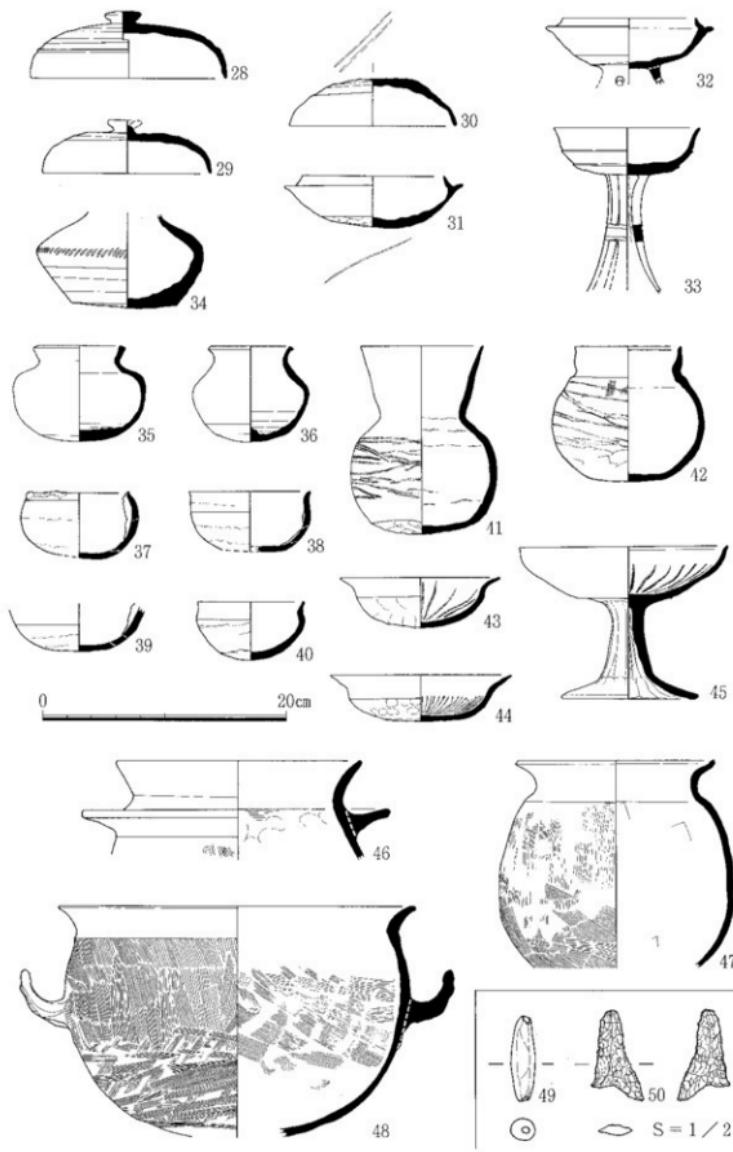


図25 出土遺物(2)

尻繫や胸繫につける飾り)が見られます。また脚や尻尾だけでなく、たてがみや尻の穴までも表現されています。№20~27は主な遺構の埋め土に含まれていたものです。6世紀後半以降に属するものが多くみられます。

図25は2区からみつかったものです。№35、36は須恵器の壺。漆かと思われる黒っぽい物質が内面に残っています。また№36の外側の底には筆状のものに入っていたのか、亀の甲状の痕跡が残っています。№37~39は土師器の小型の壺(写真49~51)。白色の粘土状の物質が内面に残っています。これについては分析結果を別稿でまとめています。他、土鍬(24.6g)や縄文時代の石鍬(1.7g)もみつかっています。図26は1区の井戸からみつかった上器類です。瓦器碗、土師器皿を主とします。№66は轡(くつわ 馬の口に装着し、動きを制御する)。二連式の銜(はみ 馬の口にかませる部分)と素礪式の鏡板(かがみいた 銜と面盤、手鏡を連結する)からなります。鏡板の直径は9.4cm。全体が鋲び付いていて銜の連結部分が広げられません。おそらく折り畳まれた状態で井戸に投げ入れられたのでしょうか。井戸桿として使われていた曲物は3点ありました。土の圧力によって形状が変わっていましたが、中段にあったものが一番良好な状態で残っていました。直径40cm、高さ27cmを測ります。上下それぞれは二重に巻かれています。

この調査ではコンテナに換算して100箱以上の土器類等の出土がありましたが、特徴的なことは鉄滓・輪の羽口・砥石等の鍛冶関連遺物、甕・羽釜等の炊飯具、製塩土器、獸骨が多くみられることです。表面や内面に朱や、漆が付着した土器がみつかるというのも、通常の集落では少ないことです。これらは過去の大県遺跡、大県南遺跡での調査結果と同じあるいはそれ以上の傾向を示しています。近年調査された奈良県高市郡明日香村の飛鳥池(あすかいけ)遺跡で青銅やガラスの鋳造と小鍛冶に関する工房の遺構や遺物が多量にみつかっています<sup>1)</sup>。7世紀の中頃から8世紀の初めにかけて操業されていた、官営の工業団地と考えられています。前項でも記しましたが、飛鳥池遺跡と同様にこの大県遺跡、大県南遺跡でも鍛冶にとどまらず、高温の炉を使用するあらゆる工業的生産活動を行っていたとみられます。今でいう一人コンピューターのようなものでしょう。またここでも出土量の多かった炊飯具セットを古墳時代集落(特に生駒西麓域)の展開と全体像を考えるために中心的資料として取り上げられることも増えてきました<sup>2)</sup>。

以上のように、本書で取り上げた大県南遺跡の調査では、遺跡の内容を知る上で欠くことのできない貴重な資料が多くみつかっています。そして遺物の種類やその数量のより細かな統計的な作業を現在も進めています。こうした基礎的データの作成と、過去の大県遺跡、大県南遺跡での調査結果や新たな見直しも踏まえることで、より遺跡の実態に近づくことができるものと思われます。

1) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館『飛鳥の工房』 1992

2) 江浦 洋 「古墳時代集落の変遷と特質」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅱ』 1991 他



写真47 砥石

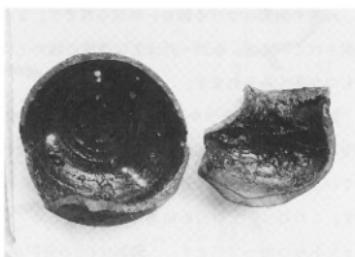


写真48 漆の付着した土器

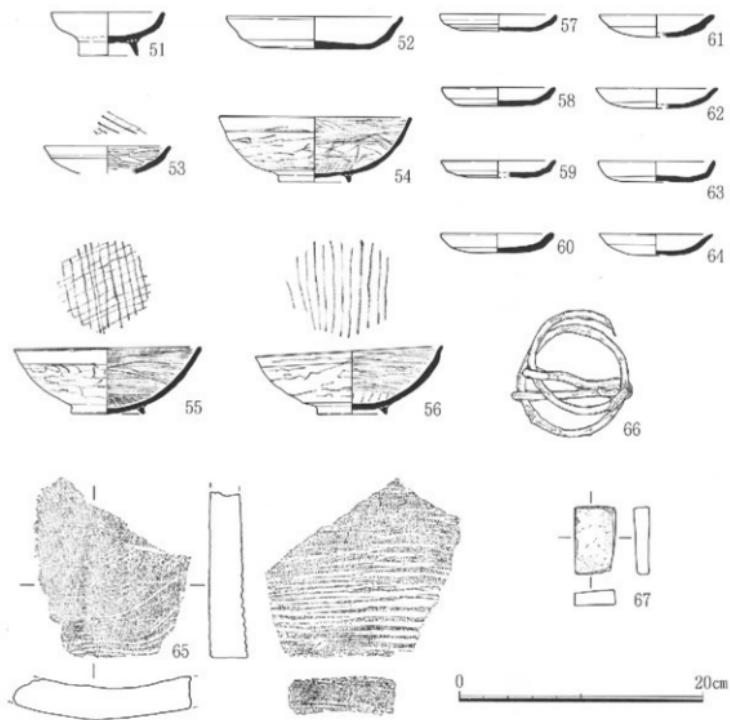


図26 出土遺物（3）

大県南遺跡93-5次の包含層から出土した小型丸底壺（図25№37～39）の内面に付着した白色の物質について観察した。白色の物質は割り箸のような方形の道具で捏ねたような跡がある。白色の物質と容器を作っている物質とが同じものかについて先ず観察した。次に、容器内の白色物質が漆喰の可能性もあるため、X線粉末回折と元素解析を奈良国立文化財研究所藤原京調査部の肥塙隆保氏にお願いした。

#### A、土器と白色物質に含まれる砂礫

土器に含まれる砂礫は石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英は無色透明、粒形が角、粒径が0.3～3.0mm、量が多い。長石は灰白色、灰白色透明で、粒形が角、粒径が0.3～1.0mm、量が僅かである。黒雲母は金色、板状で、粒径が0.1mm以下、量がごくごく僅かである。角閃石は黒色、粒径が角、粒径が0.2mm以下、量がごく僅かである。

裸眼では土器の砂礫を観察できないが、実体鏡下では石英、長石、黒雲母、角閃石がみられ、いずれの砂粒も0.3mm以下の細粒である。石英は無色透明、粒形が角、量が多い。長石は白色、粒形が角、量が僅かである。腐っていて粘土質部と区分しがたい。黒雲母は黒色、板状で、量がごくごく僅かである。角閃石は黒色、粒状で、量がごく僅かである。

土器と白色物質の砂礫構成は明らかに異なることから、土器に白色の物質を入れていることがわかる。また、土器に含まれる砂礫も白色の物質に含まれる砂礫も大槻付近の山地から流れ出る砂礫でもなく、大和川の砂礫でもないと言える。

#### B、白色物質のX線粉末回折と元素解析について

白色物質が漆喰の可能性があるために分析を依頼した。X線粉末法では鉱物の種類が分かるため実施したが、漆喰の主成分である方解石は検出されず、石英、斜長石が主成分で僅かに角閃石が含まれている。蛍光X線回折



写真49 図26№38の土器



写真50 図26№37の土器



写真51 同上の接写

による元素分析ではCaO2.1%で、更に酸処理して減量しても1%以下となり、漆喰の成分としてはCaが少なすぎるといえる。むしろ、普通の粘土にみられる量といえる。

以上のようなことから、白色の物質は長石が風化した粘土と推定され、土器の中の白色の物質は白色の粘土（白土）と考えられる。正倉院文書にてくる白土は極めて高価なもので、米粥をのりにして混ぜて白匂の材料としている。漆喰を使用される以前から白土は使用されていたようである。白色の付着物はこの白土に相当するのではないだろうか。

陶器の釉薬として古くから長石の粉が使用されている。昭和40年頃、水晶を採取しに釉薬を採取したと言われている牛駒市北田原の八丁岩付近の鉱山跡へ行ってみれば長石の風化した部分が白い土となっていた。釉薬の土としてこの白色の長石質部を坑道掘りして採掘していたようである。ベグマタイト（巨晶花崗岩）は30~50cmに及ぶ巨晶であるため長石質部を採取しようとすればできる。当然のことであるが、ベグマタイトであるために長石や雲母は含まれている。

No.	2Theta	d	I (cps)	I / I <sub>o</sub>	FWHM
1	10.320	8.5649	167	0	0.000
2	13.780	6.4206	184	0	0.000
3	20.880	4.2507	644	168	0.360
4	21.980	4.0404	548	125	0.340
5	23.080	3.8504	344	48	0.400
6	23.620	3.7635	488	101	0.280
7	24.200	3.6746	415	79	0.380
8	26.620	3.3458	3095	1000	0.320
9	27.880	3.1974	1881	577	0.360
10	28.580	3.1207	343	47	0.140
11	29.760	2.9995	401	75	0.200
12	30.400	2.9379	369	62	0.300
13	31.040	2.8787	288	36	0.280
14	31.540	2.8342	343	59	0.320
15	35.260	2.5432	256	39	0.200
16	35.620	2.5184	285	48	0.260
17	36.580	2.4545	436	102	0.240
18	38.420	2.3410	180	0	0.000
19	39.500	2.2795	317	69	0.220
20	40.280	2.2371	230	39	0.200
21	42.440	2.1281	354	88	0.300
22	45.400	1.9960	187	31	0.240
23	45.780	1.9803	236	48	0.240
24	50.120	1.8185	561	158	0.240
25	51.360	1.7775	193	32	0.360
26	54.840	1.6726	216	40	0.300
27	59.940	1.5419	491	137	0.260
28	63.800	1.4576	221	39	0.360
29	67.740	1.3821	309	72	0.180
30	68.280	1.3725	367	92	0.240
31	75.640	1.2562	173	29	0.180
32	77.680	1.2282	135	0	0.000
33	79.880	1.1998	167	33	0.160

X-ray generator	3 KW	
Target	1.5405	A (Cu)
Monochromator	use	
KV	40.0	KV
mA	20.0	mA
Sampling Width	0.020	deg
Scanning Speed	2.000	deg/min

表1 白色物質のX線粉末法回折結果

#### 94-4次調査

- ・調査対象地 柏原市大県4-660-3、661、662-1、(663、664、665-1) の一部
- ・調査期日 1994年10月11日～10月28日
- ・対象面積 2995m<sup>2</sup>

この調査は日本ポットグレープ株式会社の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。対象地は生駒西麓南端近くに位置する西向きの土地で、現況はぶどう畠であったことから、段々畑状になっています。

1994年9月5日から7日まで6箇所の調査区（総面積90.8m<sup>2</sup>）を設定した試掘調査を実施し、その結果遺物包含層を検出した試掘4区、5区とした対象地の南西部を発掘調査の対象としました。その他他の試掘調査区については表土を除去するとすぐに地山が現れ、ぶどう畠開墾時の造成によるものか旧地形は失われているものと考えられました。調査は第6層ないし第8層、地山直上までを重機で除去し、その後人力で精査し、遺構の検出につとめました。

構造として調査区の東南部分に隅丸方形や小さな円形の柱跡や溝が、北に谷状地形がみつかりました。柱跡は径20～45cm、残ってい



写真52 調査地全景（北から）



図27 調査区位置図



図28 造構平面図、東壁・南壁土層断面図

る深さ10~40cmを測ります。溝は調査区の東南隅から西北方向に延び、北の谷につながります。幅は20~40cm、深さ5~15cmを測ります。柱穴や溝を埋める土に含まれる土器の量が少なく、それぞれの詳しい年代は決めかねますが、上層の遺物包含層の上器から判断すると、中世をさかのぼることはないとと思われます。またこの土地がぶどう畠として使われていたことからぶどう棚のアンカーや棚の柱の跡も多く含まれるようです。調査区北の谷は調査区の東北隅から入り、その幅を狭めながら西へ抜けていきます。ひとかえもあったり、人の頭ほどの大さの石が多く入っています。この谷からも中世の土器類が多く出土しました。調査区の西半は搅乱状の土坑や落ち込みがあるなどして、後世の削平を受けているようです。

遺物は古墳時代以降の土器類がコンテナに3箱分、出土しました。全体的に中世のものが多い傾向があります。1はサヌカイト製の石鎌。繩文時代のものと思われます。重量は0.8gを測ります。2は須恵器杯身。外面底部にヘラ記号があります。7世紀代のものです。4、5は羽釜で、4は口縁の端を内側に折り、曲げ込む土器質のもの、5は口縁に段があり、鍔が上にはね上がり氣味になる瓦質のものです。時期的には14世紀頃のものでしょう。3の土師皿が谷状地形から、他は包含層からの出土です。

今回の調査地の北や南の同じような標高での市道建設に伴う調査などでも、中世の遺構や遺物がみつかっています。以前より低地の古墳時代や奈良時代の集落は強く意識されてきましたが、こう



写真53 調査区南半（南から）



写真54 調査区南半（西から）



写真55 調査区北半（南西から）



写真56 調査区西北隅（南から）

した標高40～50mの地点にも、時期は下るもの的生活址が存在することは今後注意が必要です。

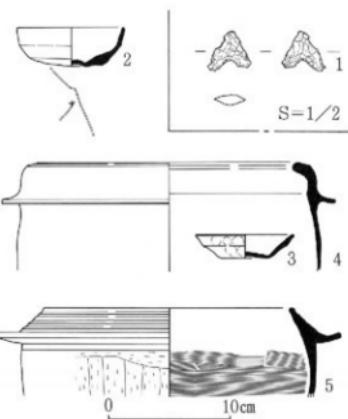


図29 山土遺物

## 第4章 安堂遺跡



図30 調査対象地位置図 (S=1/5000)

### 93-3次調査

- ・調査対象地 柏原市安堂町972-1
- ・調査期日 1994年9月12日～1994年9月14日
- ・対象面積 744m<sup>2</sup>

この調査は山本庄治氏の依頼と費用負担による、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査です。

1993年11月1日の試掘調査(9m<sup>2</sup>)で遺物包含層を検出したため、浄化槽部分(36m<sup>2</sup>)を対象としてこの調査を実施しました。まず重機により第3層までを除去し、以下を人力により掘削しました。現地表下120cmと170cmで古墳時代から中世に至る土器類が多く含む層を検出しました。湧き出る地下水の量が多く、粘りのある土が主であったことも相まって、遺構検出には難渋しました。

遺構として第5層を穿つ柱跡を4基検出しました。一边40～50cmを測る隅丸方形のものが3基、直径30cm弱の円形のものが1基です。深さは50～60cm。それぞれの間隔が建物を構成するのに極端に狭かったり広かったりしたり、方向が不揃いであることから、これらで建物が構成される可能性は

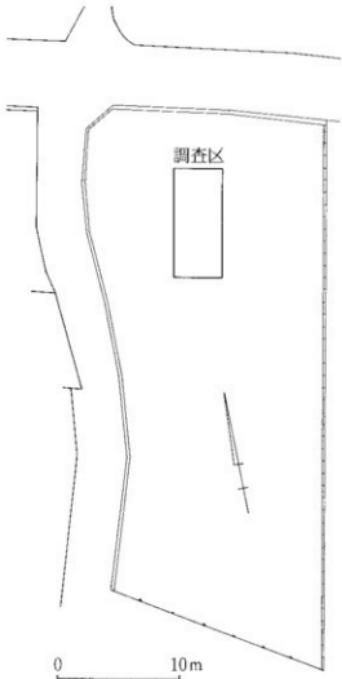


図31 調査区位置図

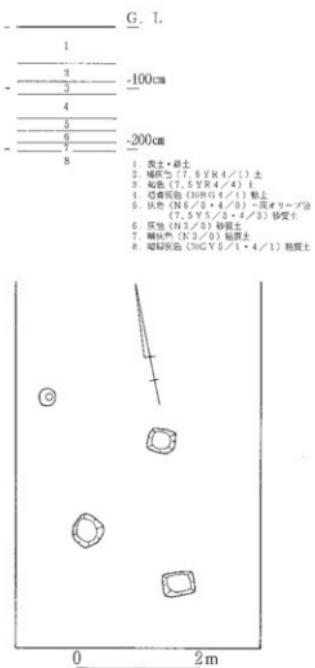


図32 遺構平面図、土層図

低いように思われます。

遺物として須恵器、土師器等の土器類や瓦がコンテナに換算して3箱分出土しました。図33のは円面鏡（えんめんけん 円形のすずり）です。小さな破片であるため全体の形状はよくわかりませんが、直径16cm程度になると思われます。2は小型の丸底壺。3、4は移動式の壺の上端部である釜穴の部分です。端部に須恵器壺の内面に見られる当て其痕と同様の同心円文があります。これらは第4層の遺物包含層から出土しました。

調査地の東北には「河内六寺」の一つである智識寺が、また東南には同じく家原寺があります。そして孝謙天皇行幸の際の宿泊施設として『続日本紀』に記される「智識寺南行宮（あんぐう）」が智識寺と家原寺との間、つまり調査地周辺一帯の約200m四方の範囲に想定されています。調査地周辺で今までに実施した主な調査として、太平寺・安堂遺跡85-1次調査、安堂遺跡85-2次調査、同87-1次調査、同93-3次調査があります。それぞれでこの遺跡を特徴づける構造、遺物が見つかっていますが、中でも安堂遺跡85-2次調査では、本来、都で廃棄されるはずの古代の荷札である木簡が6点出土したことから、直接的に関わりを持つ公的な何らかの施設の存在を窺わせます。今回の調査地ではそれを積極的に想定できるような資料は見つかりませんでした。ここからより西方の狭い範囲に限定できるようです。

#### 安堂遺跡、智識寺南行宮に関する主な文献

『柏原町史』

『柏原市史』 全5巻

柏原市教育委員会 『安堂遺跡 1986年度』 1987

同 『柏原市遺跡群発掘調査概報II -太平寺遺跡・安堂遺跡- 1986年度』 1988

同 『柏原市遺跡群発掘調査概報 1993年度』 1994

山本博 『竜田越』

塙口義信 『竹原井顕宮と智識寺南行宮に関する二、三の考察』

『古代史の研究』第4号 1982

竹下賢 『竹原井顕宮・智識寺行宮について』『河内地域史

-総論編-』 1991

他



写真57 全景（北から）

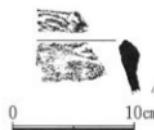
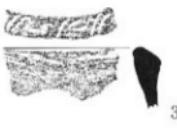
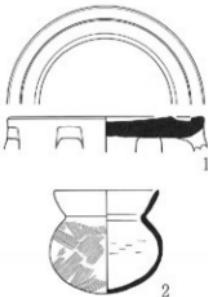


図58 出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	かしわらしいせきぐんはくつちょうさがいはう							
書名	柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名	柏原市文化財概報							
シリーズ番号	1994-IV							
編著者名	石田成年							
編集機関	柏原市教育委員会							
所在地	〒582 大阪府柏原市安堂町1-43 TEL0729-72-1501 (内5133・5134)							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在 地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査時間	調査面積	調査原因
ほんごう 本郷	ほんごう 本郷4丁目	27221	HG93-2	34度 35分 05秒	135度 37分 04秒	19940606~ 19940617	160m <sup>2</sup>	職員宿舎建設
ふなはし 船橋	たいしう 大正3丁目	27221	FH94-1	34度 35分 01秒	135度 37分 17秒	19940829~		
おおがたみなみ 大県南	おおがた 大県4丁目	27221	OGM93-2	34度 35分 03秒	135度 38分 07秒	19940110~ 19940210	324m <sup>2</sup>	共同住宅建設
		27221	OGM93-4	34度 35分 05秒	135度 38分 03秒	19940614~	81m <sup>2</sup>	"
		27221	OGM93-5	34度 35分 05秒	135度 38分 05秒	19940224~ 19940331	308m <sup>2</sup>	"
		27221	OGM94-4	34度 35分 00秒	135度 38分 16秒	19941011~ 19941028	540m <sup>2</sup>	"
あんどう 安堂	あんどうちょう 安堂町	27221	AD93-3	34度 34分 41秒	135度 38分 04秒	19940912~ 19940914	36m <sup>2</sup>	"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
本郷	集落	近世	土坑、溝	須恵器、土師器、瓦器				
船橋	集落	近世	土坑、溝	須恵器、土師器、瓦器				
大県南	集落	古墳~中世	土坑、ピット、溝 井戸	須恵器、土師器、瓦器、瓦、 鉄矛、土製品、鉄製品、石 製品、錢貨、動物遺体、昆 虫遺体、植物遺体、臓骨				
安堂	集落	古墳~中世	ピット	須恵器、土師器				

## 柏原市遺跡群発掘調査概報

1994年度

編集・発行 柏原市教育委員会  
〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号  
電話 (0729) 72-1501

発行年月日 1995年3月31日  
印 刷 東洋紙業高速印刷株

